

■「知覚障害」と「知能障害」の実存的分析と「志向の孤」

障害がある人と、正常人との違いを実存的に分析し、障害のある人は、いわば「全体性」を”地”として予感できずに図をまさに「個」としてとらえる しかないが、正常人は身体によって「全体性」を一気に引き受け、さらにそれを虚構の物語の中で体験することができる。そして、対象を捉える前に密かな存在として「予感」できる志向性を有している。

1.1 意義と「意味」(実存的な意義)

- ・感覚性と意義との間の連結に関する諸欠陥
- ・感覚性も意義とともに実存的に条件づけられているという事実を、明らかにするところの諸欠陥

→現実の「意義」を可能的に理解はできるが、全体としての「意味」はわからない

...対象との具体的本質を直接対象のうえに読みとらせ、この本質をとおしてのみ対象の「感覚的諸特性」が現れるようにさせるところの、諸意義の生命といったものを明るみに出す。...対象との、この親しさ、この交信なのである。(p226)

- ・全体性は一つ一つ部分ごとに再構成されて初めて「全体」となる
→直接性を越えた出来事を体験することができずに、常に具体的な一つ一つを解読しての現前性しか存在しない。(他者の体験や思惟を追体験できない)

1.2 志向による対象の可能性の現前化

- ・障害者にとって障害があるのは、数を純粋な概念として捉えるというような知能の実存的な基底である
→ 4の次は5、5の次は6という数列的な順番としての数でしかなく、「大きさ」という概念として捉えられないため、「大きくなっていく」広がり、辿ってきたものを残存しつつ全体性を形作っていく予感がない

- ・対象に対して行動を可能ならしめるベクトルは、潜在的に存在しており、それを可能ならしめる「志向の孤」が統一性を形作っている

■身体の志向性

- ・意識とは投射活動であり、対象を自己の周りに諸作用の足跡として残しつつ、かつそれらを支えとして次なる作用へと移行できる
→潜在的な予感としての全体性を浮き彫りにしつつ、それを基盤とする
- ・意識は視覚の与件をその本来の意味を超えて自由に発展させ、意識の自発的な作用を表現するために利用する
→虚構を可能にすることで、現実には豊かな意味を与えてくれる

...意識は背後におのれの足跡を残すことによつてのみある物についての意識なのであり、対象を思惟するためには以前つくられた「思想の世界」に依拠しなくてはな

らない以上、意識の核心においてもたえずある種の脱人格化がおこなわれているのである。(P235)

- ・意識は客観的であれ、個人的であれある一般性に向かうことで初めて意識と言える...そして「われ思う」という対立的な関係ではなく、「われはし能う」という意識の元、ある潜在的に規定された世界が運動と関係において契機的に分節化される

...われわれが自己をそれに向って投げかけ、前もってその傍にあり、われわれがい
わばつきまとっているところの、このきわめて特定な物への照合なのである。
(P236)

■身体は空間のなかにはない、それは空間に住む

- ・身体が「今」を実存として必然的にあるからこそ、先行する運動や姿勢が可能となる
→身体を拠り所として今までの歩みを捉え直し、これから現れるであろう位置も予感しつ
つ立つことが可能となる

...自分の身体を...他のさまざまな方向づけにおいて無数の相応する位置をとる開い
たシステムとしても、もっている(P240)

...われわれが身体によって空間に引き入れられ、またこの身体が置換、相応、同一
化の最初のモデルをわれわれに与えたのでなければならない。この置換、相応、同
一化こそ、空間を客観的システムたらしめめ、われわれの経験が対象に関する経験
となり、「即自」に向かって開くことを可能ならしめるものなのである。(P241)

■新しい意義の運動的獲得としての習慣

- ・学習はある状況に対してある型の解答をする能力であり、そしてそれは身体的な了解を得
ることである。
- ・空間のさまざまな場所は、客観的な位置として「すでに」あるのではなく、志向性という
狙い、動作の可変的な射程を周囲に書き留めている
→潜在的に予感としてある世界を運度によって、顕在化し世界への自身の存在を可能なら
しめ、そして「了解」する

...了解するとは、われわれがめざしているものと与えられているものとの間の、つ
まり志向と現実との間の、一致を体験することであり、—そして身体とは一つの
世界のなかへのわれわれの投錨である。(p245)

